

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	⑨【仲間や地域の人々とのつながり】 幼児や高齢の人々・障害のある人々等と一緒に生活している地域社会において、互いに支え合う仲間の大切さや地域の方々のありがたさを実感する。	教科(総合)

【題材】

被災地視察と仮設住宅との交流。さらに、防災講演会から地域の防災マップづくりという流れで、「地域に貢献できる中学生(人づくり)」をねらった活動。

【対象】

3 学年生徒、地域に住む方々(自治振興会、公民館、保護者、人権擁護委員)

【実践の概要・詳細】

**実践の詳細**

「地域に貢献できる中学生になろう!」をスローガンに今年度の復興教育を進めてきた。

具体的な取り組みとして、被災地視察「被災地から学ぶ」を行った。陸前高田市を訪問し、被害の大きさと思うように復興が進んでいない状況を知った。また、長洞元気村との交流により、地域コミュニティの重要性を知った。

被災地視察を終え、「自分達の地域はどうか」振り返りを行った。「地域行事に参加していない」「部活、部活の毎日」と言った声が多く、中学生と地域の結び付きが弱いことを実感した。

次に、県立大学の伊藤英之准教授の協力を得て、防災講演会(全校)・ハンデキャップ体験を行った。防災講演会では、釜石東中生のとした行動や川口地区に日中いるのは中学生(非常時のリーダーは中学生)だというお話をいただいた。生徒達は、自分達の置かれている状況を理解し、「自分達が川口地区を守る」という意識を強く持つことができた。

最後に、「ハンデキャップを持った方の避難誘導體験(模擬体験)」と「川口地区の危険箇所調査」を行い、防災マップの作成を行った。この活動は、生徒と県立大の学生の他に、自治振興会、公民館、保護者、人権擁護委員の方々にも参加していただき、学校・家庭・地域の三者の連携を図った活動を行った。



## 【授業の展開】

## 授業の展開（ハンデキャップ体験及び防災マップづくり）

## 〔説明〕

伊藤准教授から本日の目的と内容を説明してもらおう。具体的な動きを県立大の学生に説明してもらおう。車いす、松葉杖、アイマスク・白杖を使って、避難弱者の立場と避難弱者を避難させる側の両方を体験する。それぞれの立場から危険だと思われる箇所を防災マップにまとめる。

## 〔体験〕

5つのグループに分かれ、それぞれの場所から避難所である川口中学校を目指し、ハンデキャップ体験をしながら危険箇所を調べた。健常者であれば、全く気にならない段差や凸凹、柵のない堰などが危険であることを知った。

## 〔まとめ〕

調査した内容をグループごとに整理し、地図に印と解説を付けた。その後、伊藤准教授から講評と自分の住んでいる場所の危険度を説明してもらった。



## 児童生徒の感想

- ・ 登下校している時は、全く気にならなかった所が、障がいを持った方には危ないということが分かりました。もしもの場合には、声をかけて自分のできることをしたいです。
- ・ 今日の体験と完成した防災マップの説明を聞いて、この地区にも危険箇所があることを知りました。体験してみないとわからないことが多いので、今日は勉強になりました。

## まとめ

- ・ 被災地の視察や交流を行うことで、地域コミュニティの重要性に気づき、「自分の住んでいる地域で何ができるか」本気で考えることができるようになってきた。
- ・ 中学生が地域から期待されている存在であることを理解し、「人の役に立ちたい」という気持ちが芽生えてきた。
- ・ 「災害はどこでも起きる」と考えることができるようになり、防災への意識が高まった。
- ・ 地域のつながりが大事だと気づき、地域行事に積極的に参加するようになってきた。



## 保護者・地域の感想

高齢化の進んでいる地区なので、中学生に期待する部分大きい。子どもからお年寄りまで一体となった取り組みが必要である。有意義な活動だった。